生徒の言語活動を拡大するツールとしてのiPad活用

― ICT機器の効果的な授業活用をめざして ―

大西久雄　Onishi Hisao
（埼玉県越谷市立大袋中学校）

担当教員やALTがiPad®を使用して，生徒の言語活動場面を拡大している授業の様子。（iPadはApple Inc.の商標です。）

1. はじめに

本校では，生徒の「言語活動の充実」をめざし，多くの教科でICTの積極的な活用を推進している。越谷市では，各校にPCが接続された移動式大型TVが複数台用意されると共に，本校は近隣の文教大学からiPadを10台借用し，共同で授業実践研究を行っている。英語の授業とICTの相性は大変よく，教材や活動場面の工夫により生徒の言語活動の充実がねらえるものと思われる。今回は，教師，ALT，補助教員等がiPadを7台使用した事例を紹介する。

2. 絵を10枚，教師役7名，iPad 7台の授業準備

学年は3年生，言語材料は「現在分詞の後置修飾」。本時はその導入であり，「現在分詞の後置修飾を使った英文の意味・用法を理解し，絵を見て聞き手に正しく伝わるように話すことができる」をねらいとしている。この「絵を見て～話すことができる」の部分でiPadを活用するのである。今回は，生徒の言語活動の機会を拡大するために，まず絵を10枚用意し，7台のiPadに納めた。絵はそれぞれ「～している○○」と表現できるもので，場面が共に描かれている。さらにそのiPadを各1台ずつ持った教科担当，ALTの他に文教大学の学生4名，さらに校長（筆者）と，計7名の教師役を配置した。

3. どう言語活動を拡大させたのか

各教師は生徒にiPadで絵を見せ，生徒はその状況を習った表現を用いて英語で言う。表現できれば，合格した証としてのカードをもらい，次の教師のところへ行く。タスクの絵には仕掛けがある。7枚までの絵は行為が単一で，ほぼ同程度のバリエーションであるが，最後の3枚は，行為が複数あり，校長のiPadで出題されるのである。その1枚が左下の絵で，「～している」の情報が沢山あり，生徒は自分で考え選択しなければならない。この応用的な活動によって，さらにねらいに迫ることができる。

4. おわりに

絵を単に示すだけならiPadでなくともよい。しかし，絵を拡大して様子を示す，瞬時に次の絵を表示したり，戻ったりと生徒のリズムに合うスピード感は紙ベースの比ではない。「iPadやICT機器があるから使う」発想から，それらを「言語活動の拡大のためにどう使うか」というような絞り込みが大事である。本事例は特殊なケースであるが，複数教師を理解の早い生徒で補うことも考えられるだろう。